超短期オンライン海外プログラムにおいても異文化適応力を伸ばす方策

ー　客観的評価とアンケート調査に裏付けられた成果　ー

小早川 裕子（東洋大学）

東洋大学国際教育センターは、2022 年 2 月 12 日（土）から 16 日（水）に 4 日間の試験的な超短期オンライン海外プログラムを実施した。「実践型異文化理解研修 : Meet the World (MTW)」と名付けられた本プログラムは、海外の学生と「つながる楽しさ、違いを知る楽しさ」を体験し、「もっと知りたい」「もっと話せるようになりたい」という気持ちを引き出す事を目的に、まずは異文化には関心があってもグローバル教育プログラムに一歩踏み出せずにいる学生を惹きつけ、異なる文化背景を持つ海外の学生と交流することの楽しさを経験する場を提供する事を目指した。本プログラムの効果を研修後の学生アンケート調査と客観的指標により分析した結果、4 日間という短い研修でありながらも目標を十分に満たした成果の高いものであることが判明した。以下に、本プログラムの内容と方策、そして、調査結果から高い成果を導いた要因を検討する。

MTW の企画には国際教育センターのみならず、ライブデザイン学部から 2 名の教員、国際学部から 1 名の教員、そして、外部企業である With the World（WTW）が企画に携わった。企画者が MTW の内容で細心の注意を払った点は、英語を共通言語として使うものの、いかに学生が海外の学生との意見交換を楽しみ、積極的に取り組むようになるかであった。これらの目標と目的を達成するために、次なる 7 つの仕掛けをプログラムに組み込んだ。１）日本に関心のある海外学生の招集、２）小規模（参加者：本学生 13 名、ネパール生 3 名、フィリピン生 8 名）研修、３）3 カ国の文化・生活と大学紹介、４）質問型自己紹介、５）オンラインランチ交流会、６）英語力不問、翻訳アプリ使用認可、プロのファシリテーターである WTW のスタッフが各グループに配属し、必要に応じて話し合いを誘導・通訳、７）研修テーマを「交流国で歓迎される日本既存の商品・サービスを提案し、現地での適応化を考える」とした。募集要項にこれらの仕掛けを紹介することで、学生の英語に対する不安を拭うと共に彼らの関心を惹きつけるようにした。

MTW は、1 日あたり午前と午後の２コマ（各 90 分）の日程で 4 日間行った。初日は本学学生のみでアイスブレイク及び異文化理解基礎理論の講義を日本語で実施した。2 日目から交流国とのセッションが始まり、午前に国・大学紹介、午後は 3 グループに分かれてアイスブレイク、現地で歓迎されそうな日本の商品・サービス紹介（本学の学生各自２点を考え、パワーポイントを事前に準備）の後、グループとして 2 点を選出すべく英語で議論した。3 日目の午前は、発表スライドの作成、午後に発表。4 日目は、本学の学生のみが、MTW 企画協力をした教員 3 名を前に成果発表とプログラムのリフレクションを行った（午前で終了）。4 日間のプログラムの内、交流国とのセッションは実質 2 日のみであった。この短い期間に円滑なグループワークができたのは、次の点がうまく機能したからだと考える。１）事前課題として、日本の商品・サービスを考えパワーポイントを作成、２）授業後にグループ内で各自アイディアや質問を掲載できるよう Google スライドを準備、３）グループ内の SNS 共有。事前にアイディアを準備した事で、本学の学生は全員自らが説明する機会を得た。グループとしての考えを議論し、まとめる時間は 2 日目の午後と 3 日目の午前に限られていたが、SNS を交換したことで、授業後も彼らは意見交換を続け、Google スライドにアイディアを書き込んだ。こういった工夫の結果、3 日目の午前の作業では、出されたアイディアを最終的にまとめ、発表スライドを円滑に作成する事ができた。

学生のアンケート調査から明らかになったのは、以下の点である。まず、海外留学経験

とオンライン海外学習プログラムへの参加経験者は、共に 13 人中 7 名であった。参加目的として「異文化理解」と「国際交流」と答えた者は 11 名で、「挑戦・成長・視野」と「語学力向上」と答えた者は、それぞれ 1 名であった。5 段階評価による「目的の達成」では、5 が 3 名、4 が 8 名、3 が 2 名と答え、達成できなかったと答えた者はいなかった。「今後オンラインプログラムに参加したいか」との質問には全員が参加したいと答え、「実渡航の留学プログラムへの参加」には、12 名が参加したいと答えた。これにより、MTW の経験が参加学生の更なる国際プログラムへの関心を高めたことがわかった。語学面の質問、「英語を使うことへの抵抗は減ったか」には、5 が 6 名、4 が 4 名、3 が 2 名、2 が 1 名、1 が 0 名であったことから、MTW に参加し、英語への抵抗感が減った事も明らかになった。2 と答えた学生の理由は、「話を振られたらしゃべることができるが、割って入れなかった」と言う事だった。また、MTW の特徴的取り組みであるオンラインランチ交流会には、1 名を除き 12 名が満足した。満足できなかった学生は、「時差により相手国の食べているものを見る事ができなかった」と答えた。「このプログラムから得られた成果」の質問には、「英語学習意欲」「今後は異文化理解を深めるとともに自国のことを発信できるようになりたい、そのために自分から行動に移していこう」「他の国の問題や状況を自分事として考えること」など、英語学習そして異文化理解と自国理解に、より意欲的になったことが明らかになった。

客観的評価法として Intercultural Development Inventory (IDI)と Beliefs, Values, and Events Inventory (BEVI)の 2 つを採用した。IDI は MTW に集まった学生の特性をみることを目的に事前に 1 度だけ行い、17 の尺度で測る BEVI は、変化した学生のコンピテンシーをみるために、事前と事後の 2 回実施した。IDI は 5 段階で異文化適応力が示されるが、MTW に参加した学生は自文化中心的思考からグローバル的思考への移行段階である「最小化」であることがわかった。「最小化」とは、他文化との共通点や普遍的な価値観に気付いてはいるが、その気付きは表面的に捉えられており、より複雑な異文化への理解がまだ欠けている状態にある。BEVI のグローバルコンピテンシーをみると、50 が平均であるのに対し、57 と平均を上回っていることから、異文化適応力を一定程度持つ学生が集まっていることがわかり、その点で IDI の結果との相関性があると確認できた。この BEVI によるグローバルコンピテンシーでは、4 日間の研修後の平均は 73 となり、16 ポイントも上昇した。その他 BEVI で顕著な変化が見られた尺度は、自己・他者・世界に対するオープン性並びに思慮深さを示す「社会・情動の理解」で 10 ポイント、社会や文化などに進歩的でありオープンである程度を示す「社会文化的オープン性」は 6 ポイント高まった。これらの結果から、学生たちが自己を含む周辺の諸事情により開放的になり関心を示すようになった事により、グローバルコンピテンシーが飛躍的に伸びたと考えられる。

MTW の目的は学生たちに、相手国の学生と一緒に現地で歓迎される日本の商品・サービスを考えるという経験を通して、異文化理解に一層の関心を持たせ、ついては今後の語学力の向上を目指すよう刺激を与えることであった。学生アンケート調査からは、MTW が当初の目的通り異文化理解のみならず自国理解への関心を高めたことが伺え、またこの点は BEVI の客観的評価からも証明されている。そして、学生の英語への抵抗感も減り、英語学習意欲も高まった。しかし、彼らの異文化理解と語学力向上に向けたモチベーションを維持し深化させていくには、学生たちが行動に移していけるような更なるプログラムが必須である。意欲のある学生たちが参加できるグローバル教育プログラムは多く存在するが、異文化に関心がありながらもグローバル教育プログラムへの参加を躊躇する学生たちが、もっと気軽に異文化と触れ合う事を楽しみ、その楽しさから自分をもっと高めたいと自主的に行動を取るようになるプログラムもまた必要である。今回の試みは試験的であったが、学生アンケート並びに客観的評価からも、一定の成果が明らかになった。今後も MTW のように学生が気軽に楽しみながら参加できるプログラムを通して、一歩前に踏み出せずにいる学生の未知の可能性を引き出す機会を提供し続ける事が求められていると考える。